

2. 「さきがけはくとう」の大玉生産に適した葉果比及び着果間隔

[要約]

やや小玉傾向の「さきがけはくとう」において、市場ニーズの高い230～250 g 程度の大きさの果実を安定的に生産するには、成熟時の葉果比を120～140枚/果とし、目安として、最終着果間隔を結果枝の長さ50cm当たり 1 果となるように管理する。

[担当] 岡山県農林水産総合センター農業研究所 果樹研究室

[連絡先] 電話086-955-0276

[分類] 技術

[背景・ねらい]

「さきがけはくとう」の果実は、既存の早生品種と比較するとやや小玉（育種段階では210 g 程度）である。市場ニーズから、230～250 g 程度であると販売しやすく、単価も見込めることから大玉生産が必要である。一般的に、果実の大きさは葉果比と相関があり、本品種は「清水白桃」に比べて、葉芽の着生間隔が短く、葉の大きさが小さい特徴を有することから、安定的な大玉生産に適した葉果比及び着果間隔の指標を得る。

[成果の内容・特徴]

1. 葉果比と果実重には有意な正の相関がみられ、230～250 g 程度の果実を生産するために必要な成熟時の葉果比は120～140枚/果である（図1）。
2. 「さきがけはくとう」は「清水白桃」に比べて結果枝10cm当たり約4葉芽と多く、平均展葉枚数は6.5枚程度であることから、葉果比を120～140枚/果程度にするには、最終着果間隔を結果枝の長さ50cm当たり1果にする（表1）。
3. 最終着果間隔を40cm及び50cmで栽培したところ、着果間隔50cmで葉果比が目標範囲となり、着果間隔40cmに比べて果実重が有意に大きい（表2）。

[成果の活用面・留意点]

1. 予備摘果は結実の判断が可能になり次第速やかに行い、最終着果数の2倍量となるように、満開後35日までに着果間隔25cmに摘果する。その後の本摘果で変形果や病害虫被害果などを優先的に取り除き、満開後45日までに着果間隔50cmに仕上げる。
2. 葉果比と糖度との関係に一定の傾向はみられない。
3. 過度な大玉は、核割れ果が増加し、日持ち性が低下する。
4. 農業研究所における樹齢4～6年生の若木による結果である。園地状況や樹齢によっては、現場の状況に応じて着果間隔を微調整する。

[具体的データ]

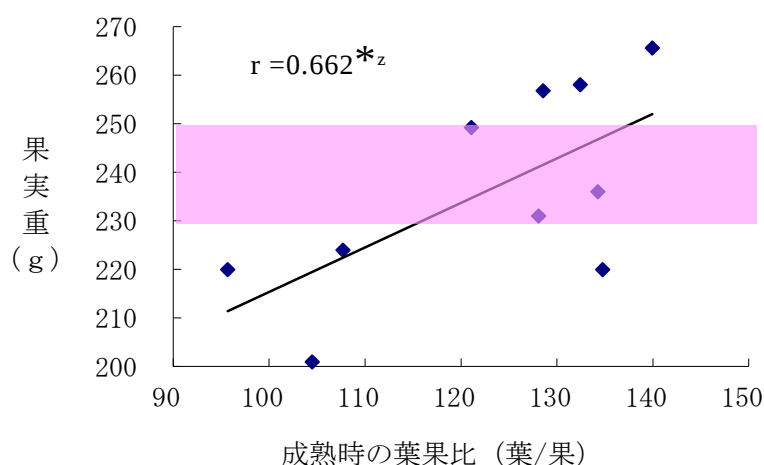


図1 成熟時の葉果比と果実重との関係
(2013～2015年、4～6年生樹)
z 5%水準で有意差あり (n=10)

表1 「さきがけはくとう」及び「清水白桃」の
結果枝10cm当たりの葉芽数(2013年)

品種	結果枝10cm当たりの葉芽数 ^z	
	長果枝	中果枝
さきがけはくとう	4.1 ** ^y	3.9 **
清水白桃	2.6	2.4

^z満開15日後頃に調査、長果枝：30～60cm

中果枝：10～30cm

^yt検定により、品種間に1%水準で有意差あり

表2 着果間隔の違いが成熟時の葉果比、果実重及び糖度に及ぼす影響(2014年)

処理区	葉果比 (葉/果)	果実重 (g)	果実重の割合(%) ^z		糖度 (° Brix)
			223g以上	250g以上	
50cm間隔着果	128.1 * ^y	231 *	61.0 *	28.2 ns	12.0 ns
40cm間隔着果	107.7	224	52.3	25.0	11.9

^z4kg当たりの果実数により、223g～は18玉以上、250g～は16玉以上の目安となる

^y葉果比、果実重及び糖度はt検定により、果実等級の割合は χ^2 検定により、*は5%水準で有意差あり、nsは有意差なし

[その他]

研究課題名：モモのオリジナル品種の高品質安定生産技術の確立

予算区分：県単

研究期間：2012～2016年度

研究担当者：樋野友之、荒木有朋、藤井雄一郎

関連情報等：1) 日原ら(2012)岡山農業研報、3：[11-15](#)

2) 平成25年度試験研究主要成果、[35-36](#)

3) 平成27年度試験研究主要成果、[27-28](#)、[31-32](#)